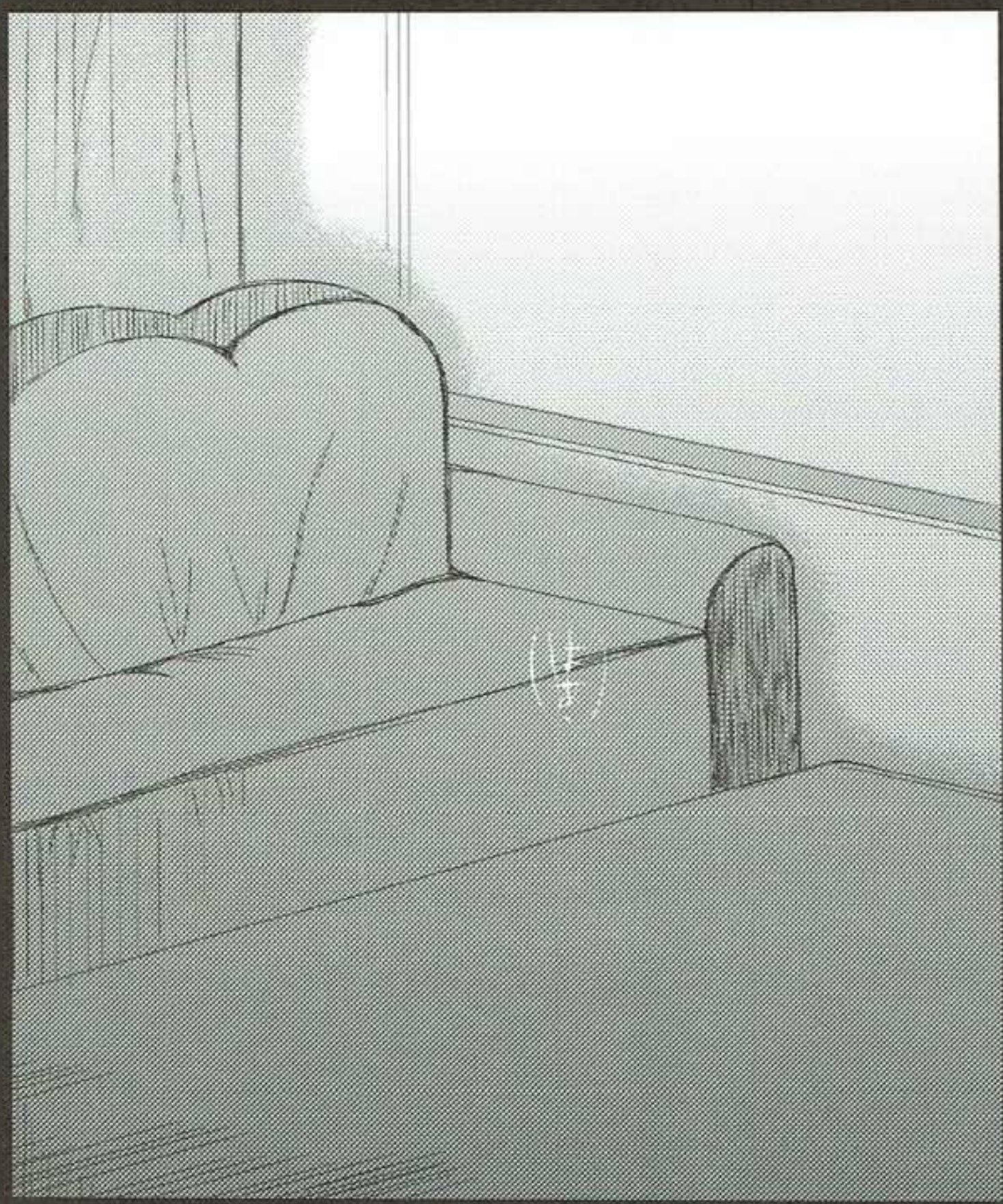
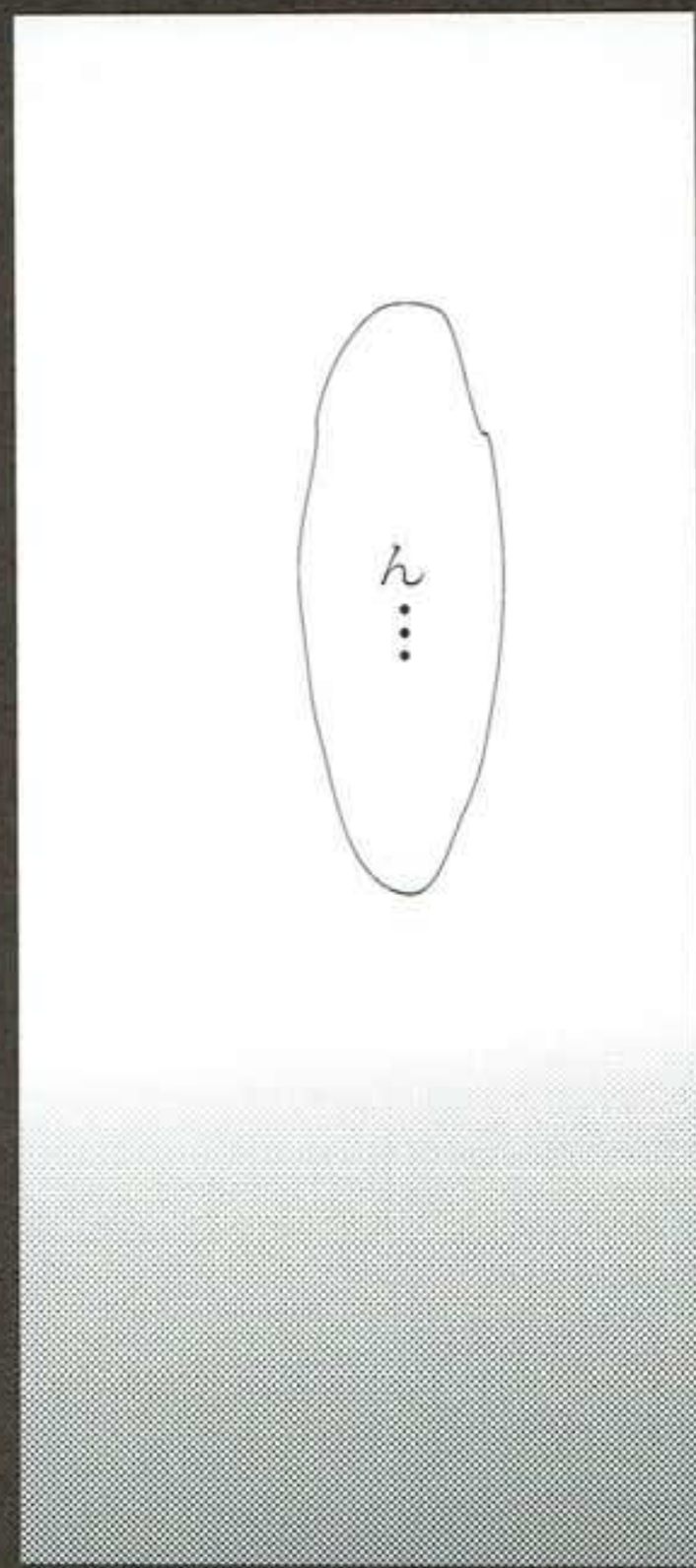
俺の助手のデレが有頂天でとんでもないまるまると知らない

2010 ninokoya

18




h……

はぁ
はぁ
く……
あぁ……

はぁ…
ん…っ
くちゅ…

ん…
ふぁ…
ふる…
つぷ
つぷ
ぷる…
ぷる…
あの…ね♡
あ…♥
くちゅ…♡
ぐぷぷ
はぁ…♡
ギッ…!
はっ…あ♡
おか…べ…
ぬぷ
岡部…っ♥
キシシ
つぷ
つぷ

あ…

ふぅ♡

あ…♡

両都…♡っ

ぷぷっ

ぷぷっ

はぁ

ぷぷっ♡

ぶるんっ♡

あはああっ♡

ぷちっ

ふぅ♡

ぷちっ

ぶるんっ♡

あ♡っ…ふぅ♡

ふぅ…♡

ぷちっ

ぷちっ

ぷちっ

……

……また、やっちゃった…

一部始終見ていた人

ドキ

ドキ

ドキ

おおお…

今、酷い自演を見た…

徹夜明けでソファの陰で眠っていたはずだが…

もうダメだ…

ビクッ

ヤバい

何故か起きたらこんな事に…き、機関の陰謀か…っ

18禁

そして明らかに出ていくタイミングを逃してしまった…

今出ていくときっと鬼●とか●作とかそういう展開になる世界線に収束する…！

ちょっとなにそれ

そして…最後にはヤンデレルートに入るに決まってる…！ッ

エロゲ脳的な考え

※過去の自分の行動を反省してかなり慎重になってるらしいオカリン

あっ
ガチャ
シャワーか…
ぺたぺたぺた…
よし
今のうちに…
PANTSU！
しかも使用済!!
アーン
アホか！あの助手
せっかく人が気を使って
気付かないふりして出て行って
やろうとしてるのに
こんなもん置いてて
誰か入って来たら
どうするんだアッ——
ドッ
ドッ
ドッ
石原直

危ない危ない
下着を忘れるなん…

バーン!!

て…

AA…

アッ…

えっ

ぶるぶる

あわわわわ…

え？

お、岡部
あんた何で…？

そ、それにおま、
それ私のパ…パン…

えっ？

プルプル

も、もしかして…
ずっといた？

フルフル

……へ、へえ

……
……
……そう

じゃあ…
仕方ないわね…

バッ！

カッカッカッ…

お、おい助手よ

お、俺はそんな気にしては…

って何だ
その道具類は？！

あッ貴様
それで俺の記憶を
いじる気か!?
死ぬからな？
やめろよ！

ドリドリドリ

うるさい
その脳掻っ掘いて
記憶を書き換えてやるッ

やぁの

アホか
死ぬぞ！俺が！

やぁの

ふぅ

しかし
熱すぎじゃね？
常考

…でも、やっとラボに
着きましたね。

ジューシー
からあげ

まゆしいは早く
からあげが
食べたいのです～

ヤンバーグ

も～
全くまゆ氏は
さっきからそればっか…

れ？

ガチャ

ガチャ

ダルか？
こら早く離れ…
！
ドミ
ドミ
ガチャ
ガチャ
まずい…！もうダルが入ってくる…
履いている暇はない…ッ
パーン
来いクリスティーナ！
ガシッ
きゃ…

ガチャ

あれ
誰もいない罠？
物音聞こえたんだけどなぁ

ダル君
はずれだね～

つかオカリンも
牧瀬氏もいないし
これってつまり…

2人で出かけてるって
パターンじゃね？

リア充爆発しろって
やつだね～

うはw
まゆ氏厳しいw

ピチョン

ピチャー。。

ドキ

ドキ

ドキ

ドキ。。

ピチャ…

……

…なんで
シャワー室に
逃げ込むのよ？

貴様…そのセリフは
今の自分の格好を
見てから言ってもらおうか…

く…っ
把握した…

こんな狭い所に連れ込んで…
ドキ
へ、変なこととかしないでよね…
…ついさっき俺のラボの俺の椅子で変なことしてた女にそう言われてもな…
てくてく
ドキドキ
…しかし何であんなところで？
こんなこと言うのも変だがホテルに帰ってすればいい事ではないか…
……
だって
かあ
あんたって…あんまり自分から手出してくれないし
椅子に座ってに、匂いとか嗅いでたら…なんか…勢いで…
あああ

…お前
匂いフェチか？

俺は…

あるあ…ねーよ…

ガーン…

…さっきも言った
でしょ

岡部の椅子だから
しちゃったの…

あそこで
しちゃったのは…

かあ

ここがあんたの部屋で
あれがあんたの椅子だから…

あ

あああ

いつも岡部が
あそこに座ってるからよ…

お、おまえ
何という
恥ずかしい告白を…

あばばばばば…!!!!

…う
あんたが
聞くからでしょ…!

…つーか、ここまで
言ったんだから

あんたも…ちょっと位
恥ずかしいところを
見せてよ

へ?

カチャッ

ごそ

ごそ

ギャアア!
な、なにをするだァッ——

(小声)

何よ
あんただって
ここがこんなに…

キッ

じゅるり

よだれ!よだれ!

お前ちょっと
HENTAI
自重しろ

すりすり

ぐりぐりぐりぐり

きゃ…

ぼろろん

バ

く…っ

キーン

べ、別にあんたのォ…オチン…なんて見たって何ともないんだからね

た、ただ苦しそうだから出してあげようって…あんたの為じゃないんだから

鼻息荒いんだが…

それともうツンデレ出来てないからな？

…

…悪かったよ

え？

正直興奮してた…

かあぁぁ

…ずっと見ててすまなかった

だが、見てしまった過去は変えれない…こんなことしたって意味がないんだ…

あーん♡

岡部…

キュン♡

…って言っとるだろうがっ!!

だから…もうこんなことはやめて大人しく…

く…っ
この…

ぎゅっ

岡部が声出さなきゃばれない…

勝手に私の…
お、オナニー見た罰なんだから…

我慢…しなさいよ

んお…♥

レロっ♥

ハァ…

ん

ビクッ♥

ぱっ!

ビクッ

ぱくぱくっ♥

じゅぷっ♥

くぅ…っ

ぐちゅるるる

…その顔

次の時のオカズにするわ…

う…

じっ

ぐちゅるるる♡

にちゃっ♡

ってオイ なんでそんなに見てるんだっ

やめろッ は、恥ずかしいではないか！

お前…開き直りすぎだろ…

…っ

ぬるっ

ぬちゃ

ニヤリ

はぁ♡

はぁ♡

キュッ

ん!!

で…るッ

ぬぷ♡

ぐちゅるるる

ぐちゅるるるるるる

ドクン

はぁ

ぶるる

ぶるる

ぶるる

全部…飲んだのか？
ぷは…
…飲んだ…
相変わらず…苦くて…不味い…
不味いのにそこまでしなくても良かろうに…
不味いけど…嬉しいの
つっ
あんたの精液の味知ってるの…
今の私だけ…だから
でも…
もっと
もっと…
もっと知りたい
お、おい
ふっ

はぁ

おい、それはさすがに不味いだろう！

はぁ。

はぁ

気持ちよくって腰止まらない…っ

だって

はぁ…♡

くぃっ

岡部のを欲しがってるの…っ

ん…っ入っちゃう…

プぷ、プぷン

プぷン

ちょ…まっ…♡

ん…♡

ぱしっ

こ、こらっ

こ、声はまずい…バレるから…！

抑えてくれ…っ

ん…♡

ん…♡

ズボッ♡

ん…♡

ズボッ♡

ぶ…♡

ぶ…♡

ぶにゅ

ぶにゅ

岡部の指

指長くって

ふっ…

ん

気持ちいい…

…ふ
んくぅ♡

ぎゅっ

ぎゅっ

ふぁぁぁ♡

…くっ、音が…

ガァァァン!!

ぎゅっ

ぎゅっ

い…じゃない
もう

バレても…っ

岡部は…私のなんだから…っ

ぎゅっ

ぎゅっ

ぎゅっ

…う お前というやつは…！

お、岡部…っ？

ぬっ♡

ぬぽぽ♡

ぬぽぽ!!

ますます大きく♡

ぎゅ♡

ぎゅ♡

ビクッ

ビクッ

あ…き、

ダ…メ♡

は♡

く…っ

ぬぽぽ

ん…♡

ビクッ♡

く…っ♡

ビクッ♡

ビクッ♡

ビクッ♡

あ!

ペロペロ

ぎゅっ

ぎゅ~っ♡

ぎゅ~っ♡

ぎゅ~っ♡

…

…つか

このまま出ちゃってバレても問題ない

だって私

もうあんたのものだもん…

はぁ…

…

デレ期レ著しいな

…///や、やっぱい、今のなしっ！

何言ってんだろ恥ずかしい

いや…その通りだ

えっ…w

せっかく気付かないふりしてやってんのに2回戦って…

オカリン空気嫁だね～

もう帰ってあげようよ…

とっくにバレてた。

←次のページからはすてきなゲストノベル！

ふぅ、あっつぅ…この暑さ、どうにかならないのかしら」
恨めしそうな眼差しをこのサウナ化しつつある室内に漂わせてみるが、やはりこの状況を効果的に打破できる類の文明の利器はどこにも見当たらなかった。
ラボと呼ばれるこの空間にはその代わりに何の役に立つのか分からない『科学』の名を借りた『ガラクタ』が壁際に張り付いたラックに所狭しと押し込まれている。
まったく、こんなものを後生大事に取って置くよりも先にやるべき環境作りがあるだろうに。
しっとりと汗ばんだ胸元を人目がないことを理由に少しだけはだけさせると片手をひらひら動かし、
団扇代わりに風を得る。
極めて原始的動作であって、それでいて如何ほどの涼も得ていない非効率な行動に我ながらうんざりする。
半ばユニフォーム代わりとなった、この『白衣』をできるものならばいっそこの場で脱ぎ捨ててやりたい……とまで思えてくる。
もちろんそれを実行に移せる程、私の理性や道徳観は壊れていやしない。
……。

首筋から伝わった汗の雫が胸元へと滑り落ちていくのを感じて、ゾワゾワと落ち着かない気分になる。
唐突に自分の胸の内側で言いようのない衝動が特異点のように生まれるのを感じた。
我慢をしようと気を紛らわせようとすればするほど、私の思考は『ある欲求』を刺激する。
いけない、我慢しなきゃ…。
思考が傾きそうになるのを感じ、開きかけた胸元を毅然と閉じた。
今みたいに一人になると時々訪れる『あの感覚』を紛らわせるために大きく伸びをしてみる。
きっとここには熱が漂っているからだ。
私以外の『人の熱』が。
こんなのでよく『未来ガジェット究所』なんて言えたものね。PCの排熱効率と安全性を考えたら、クーラーの一つでも導入するのが常考でしょうに…。
思わず素の私が複雑な思考を含んだ溜息と共に自嘲気味な独り言を零す。
とはいえ、こんな進言を新参者にして、臨時メンバーの私がしたとしてもアイツは下手な言い訳じみた反論を展開するだけだろうし。
相手は自称『狂気のマッドサイエンティスト』などというイタ過ぎる設定厨だ。
そもそもどうしてそんな奴のところに一時的ではあっても、この私が未だに席を置いているのか……
私にも明確な答えが見付けられない。
あんな奴でも…繋がりが欲しいから…?)
一瞬浮かんだ思考の断片を咄嗟に振り払う。
だ、誰があんな奴なんか…」
わざわざ否定的な言葉を口に出して言ってから、ちょっとだけ心拍数の上がった胸中の変化を誤魔化すように視界の片隅に据え置かれたパソコンのモニターに意識を向けた。
今朝からずっと付きっ放しだったモニターに表示されたブラウザ画面には、人を小馬鹿にしたような口調のレスが次々と書き足されていく。
アメリカにいた頃、日本のリアルな空気を感じたくて密に通い続けた非現実な私の居場所…。
@ちゃんねる』という巨大掲示板だ。
今では世間的に多くの人々に認知されているが一方では便所の落書きと呼ばれたり、社会問題の影の部分と端から的外れな落書きを書き殴る者もいれば、粘着質なまでにこちらの話題に絡んでくるイタい者の妄無き『思想』が無秩序なまでに綴られていく。
だが、それら全てを含めて…そこには確かに人の意思…曝け出された人の本性が垣間見える。
文字に乗せた人間の内面が、異なる原色同士を掛け合わせたパレット上の絵具のように混ざりあっている。
そのせめぎ合いは時として避けがたい対立を生み、憎しみや怒り、そして悲しみの影を落とす。
それは決して美しいものではないけれど、とてもこの世界の本質に近いものに思える。
だからこそ、ここは私にとって居心地がいい。
科学の導く秩序を求める一方で、無秩序な人の思想が漂うこの仮想の海に漂いたいという二律背反の願望が私の不安定な心を支えている。
鬱のスパイラルに陥りそうな気分のまま、ひとしきり書き込みの内容を打ち込むとトドメとばかりにリターンキーを叩く。
その瞬間、酷く不快な眩暈のような錯覚に陥った。
私の周りの何かが歪み、そして頭の奥がビリビリとわななき、鼓膜が瞬時に音感を失う。
……しばらくすると不快感は次第に収まり、五感を取り戻していった。
なんなの、今の…」
どうしたというんだろう、一体。
このところ、あまり休息をとっていないせいだろうか。
まさかこの年で脳梗塞の兆候でも…?

掴みどころのない考えに捕らわれそうになっていると不意に首筋に空気の流れを感じ、我に返る。
異変を感じて振り向くのと同時に突然、背後に衝撃を感じた。
「きゃっ！　だ、誰っ？！」
「トゥットゥル～♪　まゆしぃだよぉ。今日も頑張ってるねぇクリスちゃん。いい子、いい子～」
耳元で生クリームいっぱいのパフェのような甘ったるい声が私の名を呼び、よしよしと頭を撫でてくる。
その声の主を理解して心底安堵する。
「ままゆり！　いきなり抱きついてこないでよ、ビックリするじゃない」
「よいではないかぁ～、減るもんじゃあるまいしぃ～」
「そうそう驚かされたら確実に私の寿命が減ってるわよ」
「またまた～、クリスちゃんったら大げさだよぉ。オカリンが言ってたよ、クリスちゃんは心臓に毛が生えてるくらい肝が据わってるから、ちょっとくらい脅かしても大丈夫だって」
「岡部めぇ、いつかその軽口を永遠に叩けないように処置してやるから。取り敢えずは大脳新皮質周辺に電極を――」
「まぁまぁ、大目に見てあげようよ。
――あっ！！！」
「何？！　突然どうしたの？」
まゆりは素っ頓狂な声をあげて、私から離れるとポンと掌を打ってニコリと笑った。
「あるまいしいって、まゆしぃに似てるよねぇ～」
「…そのネタ、前に聞いた気がする」
「いいネタは何度聞いても新鮮なんだよぉ」
屈託のない笑顔を浮かべる少女の名は『椎名まゆり』。
こう見えても、この未来ガジェット研究所のラボメンNo.02だ。
もう見慣れたまゆりのトレードマークである鍔の広い白い帽子をふくよかな胸元に抱きしめ、
いつもと変わらぬ愛嬌のある笑顔を振り撒いていた。
その笑顔につられて、いつしか私も笑っていた。
元々人懐っこい子なのだろうか、会話を重ね、友好関係を築いていくにつれ、今みたいに遠慮なしにスキンシップを図ってくる。
ラボメンに自分と同じ女の子が参入したのが余程嬉しかったのか、それとも単に私のことが気に入ったからだろうか。
まゆりの私に対する接近は次第に禁断の領域へと近付きつつあることを漠然と感じ始めていた。
でも…今の私はそれを拒むこともなく、寧ろ彼女が自分に懐いてくることが純粋に嬉しくもあった。
まゆりには失礼だけど、愛玩動物と戯れ、愛でている感覚に近いのかも。
「クリスちゃん、どうしたの？　じっとまゆしぃの顔を見てる」
「ううん、何でもない。それより今日は一人だけなの？　岡部や橋田は？」
「オカリンとダル君は今日は学校に行く日なんだって。結構遅くなる、みたいなこと言ってたよ～」
「そっか、それじゃあしばらくの間はムサい野郎二人からは解放されるわけだ」
「えへへっ、ということはぁ～、今このラボはまゆしぃとクリスちゃんの二人っきりで。いわゆる女の園なんだねぇ～」
「……」
「ねぇねぇクリスちゃん。そういえば、いつも気になってるんだけど…まゆしぃが来た時にパソコンでいつも何見てるの？」
「う…こ、これはね…えっと、まゆりにはちょっと難しい内容のサイトなのよ。
そ、そう…ある特定の専門分野における科学的な考察を互いに情報交換する、
極めて学術的な意見交換の場で――」
「ふぅーん…」
モニターを覗きこむように向けられたまゆりの無垢な視線を遮るように咄嗟に彼女の前に立ちはだかり、
不自然なくらいの笑顔を浮かべて見せる。
まゆりをはじめとして、岡部にも橋田にも私が@ちゃんねるの常連だと知られるわけにはいかない。
…他人に隠しごとをする後ろめたさは『あの衝動』も含めて、
今の私にはどうしても必要な安定を求める『要因』の一つだ。
人前に立つことを求められるようになった私が『私』という心のバランスを保つのには、
その相反する要因が必要だから…。
まゆりは私の顔色を伺うように無言で頷いてみせるとまた緩んだ笑顔を浮かべた。
「まゆしぃはてっきり、クリスちゃんがいけないことをしてるのかなぁって思って心配になりました」
「いけないこと…？」
「たとえばぁ、ダル君みたいにパソコンでエッチなサイトとか見てるのかなぁって思って」
「誰がするか！　あんなHENTAIと一緒にしないで！」
っていうか、まゆりはどうしてそんなこと知ってるのよ、もしかして見てたの？」

まゆりは何も言わずにニニニと笑うだけだった。
まゆりも少しは気をつけなさいよね。男はね、いくら聖人君主を気取ってても突然豹変するんだから」
しかしなんとも寛容な子というか、警戒心が足りないというか……正直、彼女のことが心配になってきた。
んーと、それなら大丈夫だよぉ。ダル君は二次元のお嫁さんにしか興味ないって言ってるから」
それを真に受けるまゆりもだけど、橋田もよくそんなことを公言できるわね……。
本当にここの人間は個性的過ぎるわ」
えへへ、誉められちゃった」
……誉めてない」
まゆりはそれからいつものように指定席化したソファーに座るなり、ゴソゴソとどこからともなく
一房のバナナを取りだした。
まるで自宅にでもいるような感覚だ。
それほどにこのラボは彼女にとって、ごく当たり前の場所なのだろう。
バナナ～、バナナ～♪ まゆしぃのバナナは88円～♪」
バナナといい、唐揚げといい、よくも飽きずに毎日食べれるわねぇ」
んん～っ、好きなものはどんなに食べてもおいしいのです。クリスちゃんも食べる？」
十切りたての一本が私の前にすかさず差し出されるが私は軽く首を振って丁重にお断りした。
ここ最近は会う度に薦められる。
つい先日もまゆりに薦められたままにバナナをパクつくとたまたまその様子を見ていた橋田に
今のシーン、リプレイよろ』などとふざけたことを言われた。
そんなことを思い出している間にまゆりは手にしたバナナをの皮をよいしょよいしょと剥くなり、
パクリと勢いよく口に含んだ。
言い食べっぷりではあるが、橋田のセクハラ発言のせいでどうにもいかがわしい妄想を重ねてしまう。
まゆりはそんな私の妄想など知るはずもなく、口いっぱいに頬張ったバナナを一生懸命口内に含む。
んっ、んっ……」
気のせいだろうか。
敢えて口の中でバナナの原型を留めるようにゆっくりと飲み込み、その表面の感触を弄ぶように舌全体で
舐めている。
妄想に長けた男子でなくとも、その仕草がまるで男女の性行為の一部を髣髴させる……。
まゆりに限ってそんなはずはない、と思う一方で彼女の一連の動きはまるで私の胸中の妄想を掻き立てさせ、
なじっているかのようだ。
椅子に腰かけたままの私はなんとなく両足の付け根に違和感を覚え、ふとももの内側に力を入れた。
ふリスはんもいふ？」
何言ってるのかわかんないわよ。ちゃんと食べ終わってからゆっくり聞いてあげるから」
ようやくバナナを食べ終わったまゆりは充電完了とばかりにたわいもない話を嬉々として話始めた。
アキバの駅前のなんとかというジャンクフードが美味しかったとか、バイト先での面白い話など――。
いわゆる『ずっとまゆりのターン』状態で私は聞き役に徹した。
彼女の話には話題の一貫性がなく、そこには一見法則性など皆無のように思えた。
無秩序な彼女の断片。
だけど、そのどれもがまゆりという人間の性格を感じさせ、彼女の感じる日々の充足感や幸福感を
共有させられる。
それでねぇフェリスちゃんも今度このラボに遊びに来たいって言ってたんだよ。
もしかしたら、また女のこのラボメンが増えるかもねぇ～」
まゆりは女の子のメンバーが増えるのがそんなに嬉しいんだ」
うん、嬉しいよぉ♪ ずっとオカリンとダル君だけじゃつまんないもん」
そっか……。あのHENTAI二人と一緒だと、いつ何時間違いが起こるかわからないものね。
監視の目は多いに越したことないわ」
そんなこと言っちゃオカリン達がかわいそうだよぉ。二人はああ見えても紳士なんだよ」
はいはい、変態という名の紳士ね。わかります」
えへへっ、なんだかよくわからないけどそうなの」
まゆりのはにかんだ笑顔を見ていると私はこんな風に同年代の子達と笑いながら会話を楽しんだ経験が
なかったことに改めて気付かされた。
これが『普通』なんだろうか。
こんな普通の時間が過ごせるのも、あとわずか……。
そう……私がここにいるのは元々『普通じゃない』こと。
すぐにまゆり達とも離れ離れになる日が来る。
そうして私はまたあの『普通じゃない普通』の生活に戻るんだ……。
なんだか、そんなことを考えていると急に寂しくなってきた。
胸の真ん中にぽっかりと大きな風穴が空いたような感じ。
心の宇宙に生まれたブラックホールのような空虚感に自分の表情が暗く沈んでいくのが分かった。
「あの……クリスちゃん？」
「……」
「ご、ごめんねぇクリスちゃん。まゆしぃ、何か悪いこと言ったかな？ 怒った？」
まゆりが表情を曇らせて顔を覗きこむ。
私は自分がとても暗い表情をしていたことを思い出し、慌てて取り繕う。
「ち、違うの。ちょっと嫌な考えが浮かんじゃって……怒ってなんてないから」
「何か嫌なことあったの？」
「ううん、なんでもないから。こっちこそ、ゴメン……」
「悩み事があるんなら、まゆしぃが相談に乗ってあげようか？
こう見えてもねぇまゆしぃはとっても聞き上手なんだから。 辛いときは何でも相談できるのが仲間なんだよ」
「まゆり……」
まゆりの真っすぐな言葉にちょぴり罪悪感を感じつつも、くすぐったいような気持ちに晒されて
素直になれない心がざわめく。
どうしてこうも心が揺れるのだろうか。
きっと、それは相手がまゆりだからかもしれない。
私には初めて会った時から、彼女がとても特別な存在に思えてならなかった。
それはまゆり自身だけの問題じゃなく、その間にいる岡部の存在があってのことからかもしれない。
あるいはその岡部さえも、求めるべき誰かへの憧憬を重ねて見ているのかもしれない。
純粋にして、倒錯した歪な繋がりを私の心の深淵は求めているのかもしれない。
本当の私はそれほどまでに疲弊し、他人との繋がりを貪欲に求めているんだ、きっと……。
「クリスちゃん、クリスちゃん！ まゆしぃの言うことちょっとだけ聞いてくれる？
きっと元気になるよ？」
「いや、その……別に、落ち込んでなんかないから……」
「いいからいいから、ちょっとだけ目を閉じて。
すぐに『ラク』になれるから……」
「こ、こうかしら？」
「そうそう、ゆっくりと気持ちを漂わせて。
息をゆっくり吸ったら、今度はゆっくりと飲み込んで……。
自分の『真ん中』を見付けたら、そこに気持ちを置いて、それからゆっくりと手を伸ばしていくんだよ」
「自分の真ん中？
手を伸ばす？」
「うん、オカリンが言うにはまゆしぃは時々自分でも気付いてない内に、こうやって星を捕まえようってしてる
ことがあるんだって」
そういえば、前に岡部に聞いたことがあった。
まゆりには時々そんな不可解な行動をすることがあるって。
設定厨の岡部に言わせれば、あれはまゆりの能力『スターダスト・シェイクハンド』が発動しているらしい。
もちろんそんな馬鹿話を本気で信じるわけはない。
「でもねぇ、本当はオカリンにも内緒にしてるんだけどあれは星を捕まえたいんじゃないんだよ。
……まゆしぃねぇ自分の『真ん中』に触りたいだけなのです」
「ごめん、それ……全然意味がわかんないんだけど」
「クリスちゃんは変だなって思わないかなぁ。
まゆしぃの身体とまゆしぃの心はどこからどこまでが一緒なのかなって」
「それは肉体と精神の繋がりに関して疑問を投げかけているの？ 脳科学的には――」
「ううん、そういうムズかしい話じゃなくって。まゆしぃが自分を『まゆしぃ』だって思える場所って、
この身体のどこにあるのかなって思ってたら、あることをしたら、それが分かって。そうしたら、なんだか辛いこととか、悩みごとが消えちゃうんだってわかったんだぁ」
「なるほどね。思考の転換で精神的なリラクゼーションの方法を見付けたんだ」
「それがね、自分の『真ん中』を見付けて、そこに触る方法なの。クリスちゃんにも教えてあげるね。
それじゃあ、もう一度目を閉じて……息を吸ったら、飲み込んで……」
まゆりの独特の言い回しに少し戸惑いながらも、言う通りにしてゆっくりと目を閉じる。
試しに深呼吸をするように息を吸って、軽く吐き出そうとするとまゆりの気配が近付くのを感じた。
目を閉じたことでまゆりという存在の不確かさを覚えるはずなのに、妙に彼女の存在が私に迫るのを感じて
違和感に戸惑う。
「クリスちゃん……折角吸ったのに、吐いちゃだめだよ。飲み込まないと……」
「息を吸ったら、吐かないと――」
「違うよ、こうするんだよ」

私の目の前に私以外の存在がさらに迫る。
息遣いが近付いてくる。
そして――
「ん……？？」
私の唇に柔らかい感触が押し当てられる。
それがなんの行為であったのか、私が理解するのに気が遠くなるような時間が過ぎた気がした。
震える瞼のペールが上がると、そこにはまゆりの顔があった。
悪戯をした子供のようなあどけない表情に、ほんのりと染まった紅色の頬の色が際だって見えた。
い、今の……キ……キス？？
まゆりと私が……女の子同士で、キスって……あり得ない。
何、このエロゲ展開。唐突過ぎて、シナリオ崩壊？？むしろ、私のキャラ崩壊？？」
……あまりにも突然のことに意味不明なことを口走る。
まゆりはさっきまで私の唇と触れていた箇所を指先でツツと撫でると舌先で舐めてみせた。
ん――、こういう時はなんて言えばいいのかなぁ。
あ……そうだ、前に箱の人が言ってたっけ、こまけぇこたぁ気にするなぁ～って」
まゆりの言葉と彼女の見たことのない扇情的な表情とのギャップに私は次の言葉も失って、
ただただ心臓の高鳴りに震えていた。
今はもう何も触れていないはずの唇が、独りでにまゆりとの刹那の感触を反芻している。
たが、確実に私のこの動揺が今の『キス』で終わりを迎えるとは思っていなかった。
すなわち、私自身がこの先の未知なる事象を期待していることを意味していた。
クリスちゃん、少しは気分が落ち着いた？」
お、お、落ち着くわけ、ない……じゃない！
こ、これのどこがリクゼーションよ！
自分の真ん中を見付けるとか、全然意味ないじゃない」
焦らない、焦らない。これはまだまだ入口なのです。
自分を見付ける旅の入口に立っただけなのです」
なにその下手な新興宗教の段階的な洗脳台詞は？！
まゆり……いきなり、どうしちゃったの？！」
まゆしぃはクリスちゃんのことを本気で心配して、そして目覚めてしまったのです。
クリスちゃんを救えるのはもうまゆしぃの『愛』の力しかないのだと。
まゆしぃのアガペー神の愛がクリスちゃんを救える唯一の道なのだと♪」
……まゆりが本格的に困ったことになっている。
回避不能な未知の力によって、まるで私が辿るべき運命の線が捻じ曲げられてしまったような錯覚を覚えた。
しかし、そんな理性的な判断もすぐに頭の片隅から抜け落ちてしまうことになる。
まゆりの接近が私に新しい役割を与えようとしているからだ。
まゆりにもう一つの可能性を目覚めさせられる、迷える性の子羊という役目を。
まゆりの手が不意に私の手を取ると、それはゆっくりと彼女の胸の狭間へと導かれた。
同性とはいえ、他人の胸に触れるなんてことは記憶の中に微かに残る母親以外ではこの時のまゆりが
初めてだった。
まゆしぃのおっぱいにはアガペーが詰まってるんだよぉ」
ア、アガペーの使い方間違ってる……」
ふにゅ……。
これが漫画のワンシーンなら、そんな擬態語が付属していそうだった。
それくらい、まゆりの胸は私の予想に反して柔らかく、心地の良い感触だった。
あまりにも突然の出来事ではあったが、その瞬間……私の生来の気質とも言うべき好奇心と探究心の心が
彼女の胸に魅了されてしまった。
指先、そして手の平全体がその至極の感触を一瞬にして覚えてしまった後には、もはや私自身の恥じらいなどは
ここかになりを潜めてしまった。
もっと触れたい……。
服の上からでも分かるまゆりの胸は同性としては少々うらやましく思える程の豊かさをもっている。
取えて想像したことのなかった感触だが、こうして実際に触れてしまったことで妙に納得してしまった。
よゆりの胸には優しさが詰まっている。
あ……」
ふにゅふにゅとまゆりの胸が私の手の力加減で多様に変化していく様子を伺っていると
不意に彼女の口から短くも濃厚な吐息が漏れた。
その声の意味を私は知っている。
誰もいない一人だけの空間で、私が私自身を慰める時にどこからともなく訪れる、快楽の吐息。
ゆりが……私で、感じてる……。

私の指で、私の手付きで、感じているんだ。
「……んっ、クリスちゃん……」
目を細めたまゆりがトロンと酔い痴れた表情の視線のまま、私に顔を寄せてくる。
呼吸が荒い。
まゆりの存在がどんどん私に引き寄せられていく。
女の子同士、なのに……。
それなのに……。
私はこのラボにこもった熱が私の抱える寂しさや空しさを埋めるべく流れ込んできたような錯覚を覚えた。
気付いた時にはまゆりの身体を抱きしめ、自ら彼女の唇を奪っていた。
食べたばかりのバナナの甘さが彼女の口全体に広がっていた。
これがまゆしぃのキスの味……。
そう思うと無性に愛しくて、貪欲に彼女の中を求めて舌を動かしていた。
濃密なキスをする内に、私の身体の内側がチリチリと発熱し、快楽に反応して命令された生理的機能が
本格的に働きはじめた。
潤滑液が秘所を潤し、やがて受け入れるべき何かを求め、その溢れる蜜で私の下着を濡らし、太股へと
伝わり落ちていた。
「んちゅ……ん……」
まゆりが子犬のように鼻を小さく啜らせるようにモノ欲しそうな眼差しで唇を寄せてくる。
拒むことも、疑問を抱くことも忘れ、私は自分の深淵が囁く方へと意識を静め、まゆりとの行為を受け入れ、
求めていった。
どちらがということなく、互いの胸をまさぐり、背中のラインを手で撫で、骨盤の隆起した部分を伝わり、
両足の付け根へ向かう。
もう知っているんだ、まゆりも。
子供みたいな行動をする彼女でも、もう知っていたんだ。
女としての悦びを。
自分を慰める術を。
他人と快楽を共有する方法を。
なんだかそれが後ろめたくもあり、安心できた。
彼女も私と同じ。
卑しいところを持った、同じ人間なのだと。
「クリスちゃん……もう、こんなになってるね。嬉しいなぁ、まゆしぃのアガペーがクリスちゃんを満たしてるって」
まゆりは私の太股を這わせていた指を鼻先に見せつけるように持ってくると、そのぬらぬらと滴る私の牝蜜
を舌で舐めとった。
ゾクリと身体が震えた。
感じたことのない高揚感と脳の奥で弾けるような快楽の火種が
まゆりのその一連の行動に過剰な反応をしめした。
私の……を……まゆりが……あんなに美味しそうに、舐めてる……。
そう再認識すると堰を切ったように、また太股の付け根が濡れ始めているのを感じた。
椅子から立ち上がると、私の座っていた部分のシートがだらしなく糸を引くほどに濡れていた。
紅潮した顔で、まゆりに見られないように彼女を机から離す。
だが、まゆりの視線を追うとその隠べい工作も無駄だったことを悟った。
「は、恥ずかしい……死んじゃうくらい、恥ずかしい……」
「大丈夫だよぉ、今はまゆりとクリスちゃんの二人っきりなんだから」
「こんなとこ、誰かに見られたら……」
「大丈夫、大丈夫……まゆしぃとクリスちゃんの関係は絶対の秘密なんだから」
まゆりはそういいながらもラボの入口のドアに鍵をかけにいった。
これで、この空間は完全に閉鎖された。
まゆりと私だけの……世界から隔絶された女の園になったんだ。
「まゆり……いい、の？」
こんなこと、私と……女の子同士で」
「クリスちゃんだから、いいんだよ。
まゆしぃ、クリスちゃんのこと……大好きだから」
まゆりの言葉を聞き終わらない内に、私は彼女を抱きしめていた。
女の子同士の淫らな関係など、もうどうでもよくなっていた。
私を心から心配して、私と繋がってくれるまゆりを……私は素直に求めた。
彼女の優しさがたまらなく愛しかった。
乾いた心が目から滲んだ涙で潤わされていく。

にかたいでクリスちゃん。
ゆしいはクリスちゃんを喜ばせて、笑顔にしてあげたいんだよ」
こめんね、まゆり。
りがとう……」
ゃあ、続き……しよっか」
……うん……」
まゆりは思わせぶりな視線のまま、ペロリと舌先を出して見せるとそのままワンピースの裾に手をかけ
白な肌が健康的な太股が徐々に姿を見せ、清楚な感じのする白い逆三角の下着があらわになる。
っくりと捲りあげていった。
供っぽさの残るまゆりらしいレースが幾重に折り重なったシルク素材のパンティにしばし目を捕らわれると、
が小さなへそ、そしてボリュームのある乳房を全て多いきれないでいる白いブラジャーが露出する。
固唾を飲んで見守る中、まゆりはブラの下に指先をもぐりこませ、そのまま上にひっくり返すように
くり上げる。
ほど私がこの手で形を操作したまゆりの胸が、その本来の姿をみせる。
紅色の綺麗な乳首が自己主張するようにツンと天を見上げていた。
ゆりはそこで敢えて服を全部脱がず、上胸の頂上部でたくしあげた服を抱きとめるようにして
チラの表情を伺う。
クリスちゃんとまゆしいのおっぱい、見せっこしよっか」
て、そんなこと急に言われてもの……」
大丈夫だよぉ、恥ずかしがらなくても。え～い」
ゃっ！」
私らしくない可愛らしい悲鳴に驚く間もなく、まゆりは普段の緩慢な動きとは比べ物にならない手際の良さで
衣の下に身に付けた私の服の胸元を開け広げた。
に見せたことのない私自身の二つの乳房が外気に触れ、その刺激で乳首が痛いほど反応する。
っふっふっふ、まゆしいを甘く見てはダメなのです。日頃からコスプレ衣装を手がけているから、
ょちょい～って脱がせちゃうんだから」
……無駄に凄い技能を」
クリスちゃんのおっぱい、綺麗だねぇ」
よ、まゆりのに比べたら私のなんて……ちょっと劣等感を抱きそうになる」
んなことないよぉ～。
クリスちゃんのここ……可愛いし……」
ゆりはそう言いながら、私の勃起した両の乳首を親指と人差し指の腹で挟むとしごくように弄び始めた。
れるような感覚が乳首の先端から恐ろしいスピードで私の脳の中心を穿つ。
人でにだらしなく開いた唇から微かなあえぎ声を洩らして、私はまゆりの頭を抱きしめていた。
……ぁあ……ぁあ……ち？……ちくび……ダめぇ」
くすくすっ、ここ……弱いんだね、クリスちゃんも……」
まゆりはそのまま両手で私の小ぶりな乳房全体を絞るように掴み、突出した乳首を二つ一片にその口に含んだ。
っとりする唾液まみれになったまゆりの舌が乳首の先端から側面、乳輪の際を丁寧に舐め上げていく。
えて、ちゅちゅうと棒ジュースでも吸るかのように乳房全体を吸引され、ただでさえ敏感に尖った乳首がさらに
大化させられる。
から両足の付け根が支柱を失った構造物のようにぐらつき、まともに立っていられない。
度はまゆしいのも、して……」
甘えたような声で胸の間に顔をうずめたまゆりが上目遣いで求めてくる。
私は言葉なく、キスで応えると彼女の前に軽くひざま付き、まゆりもまた私の意図を悟って前かがみになる。
先上げた先にはまゆりの二つの愛房が実っている。
を突きだすように、彼女の薄紅色の実を求めていく。
つん這いになって餌をねだる牝猫のように、私はまゆりの乳首が降りてくるのを大人しく待った。
ぴゃぁん……」
ぺしゃぺ、しゃと舌先と乳首の接点が音を立てる。
ざと大きな音を立ててまゆりの乳首を愛撫すると、まゆりは力の抜けるような声を上げる。
可愛い嬌声。
弦楽で言う所の高音域を奏でるフルートの音色のようで、耳にして心地いい。
まゆりの表情を伺いながら、熱で茫然とする頭を震わせながら、彼女の胸を楽しむ。
次第にまゆりもさっきまでの私同様に四肢の踏ん張りを失い始め、身を預けてきた。
まゆりの両手が私の頭を押さえこみ、ふくよかな乳房の枕に埋めこまれる。
し酸味のする汗の匂いとまゆりの甘い匂いが私の嗅覚に、麻薬のようなまどろみを与える。
しずめ、発情期の猫にマタタビを嗅がせたような様子……とでも例えればいいのか。

「まゆしいのおっぱい、クリスちゃんの舌でぺちょぺちょされた……」
そのままなだれてきたまゆりに押し倒されるように、私は床に仰向けに転がされた。
床にまで垂れた私の愛液が粗相でもしたかのように軽い水たまりになっている場所で、
まゆりは私の両足の付け根に顔をうずめ、その原因となった箇所に鼻先をあてがった。
未だに残る恥じらいが防衛本能のように両足に力を込める。
だが、まゆりは予想外な力でそのささやかな抵抗をねじ伏せ、
彼女の前にぐしょぐしょになった下着の状態を晒す派目になる。
「うわぁ、もうすごいことになってるね、クリスちゃん。」
まゆしいも頑張り甲斐があるよ……とっても、素直でいい子だねぇ、ここは」
「やだっ、ちょっと……まゆ……あっっ！！」
まゆりへの反論も空しく、まゆりの手で私の秘所を隠した最後の薄い理性の城壁が取り払われる。
べしゃりと水音を含んで地面に脱がされた下着を細めた視線の端で確認すると、
恥ずかしさでどうにかなってしまいそうになる。
だが、まゆりの責めはすぐにそんな瞬間の恥じらいすらも地平の彼方に吹き飛ばしてしまうほどの快楽を
もたらすことになる。
まゆりの指が私の無防備になったクレバスの中心にあてがわれ、すりすりと亀裂をなぞっていく。
襞の震えが自分でも分かる程に意識が下半身に集中している。
まゆりの指の、指紋の溝の一本一本が擦れていくのがわかるほどに、
私の秘所は敏感かつクリアに刺激を刻んでいく。
やがて、しっとりと濡れた彼女の指が秘境の高嶺に実る果実のような肉芽を見つけ出す。
半分ほど薄皮にうずもれたソレを指の腹でそっと捲っていく。
「クリスちゃんもここ……気持ちいいかなぁ」
「はぁ、はぁ……っ！！！！！！」
声にならない声が身体の中心……いや、もしかするとそれはクリトリスと呼ばれる性器からの
悲鳴だったのかもしれない。
外気に当てられたクリトリスがヒリヒリと感じたことのない刺激で私を責める。
「まゆり、まゆり……こわい……そんなに、したら……こわいよぉ」
「……あ……痛くなかった？
ちょっと調子にのっちゃったかなぁ」
急激な性の刺激に耐えられなくなった私は子供のようにその変化に怯え、気付いたら涙を浮かべて
まゆりにしがみ付いていた。
よしよしと頭を撫でるまゆりはそのまま、私を安心させるように抱き付き、床の上で二人でしばし抱き合った。
そうしていると次第に気持ちも落ち着いてきて、下半身の痺れも徐々に収まってきた。
「クリスちゃん、ごめんね。
でも、まゆしい、我慢できないよぉ……クリスちゃぁん」
「まゆり……」
身を起こしたまゆりはそのまま私に跨ったまま、服を完全に脱ぎ去るとを取り払うと、
足を絡ませ、その付け根の秘部を宛がい、前後にグラインドするような動きをみせる。
ぬるぬると互いの愛液に潤された秘所同士が擦り付け合われ、淫靡な水音が荒い呼気のリズムに合わせて響く。
ビリビリ痺れるような刺激のビートに、身体全身が無意識の内に小さくのたうつ。
「あ、あぁぁ……ま、まゆりぃ……これ、すごっ……んっ！　あぁぁぁっ！」
「これ……すごいねぇクリスちゃん。まゆしいのとクリスちゃんのおしっこするとこが、ぐじゅぐじゅってなって……
ずっとキスしてるみたいだよぉ
クリスちゃん、クリスちゃ……っんあっ！」
激しく抱き合い、互いの肌の触れ合う場所を広げ、より強く、深く互いを求めていく。
まるで肉体の内側に捕らわれた互いの本質を見付けだそうとするかのように、お互いの反応を伺いながらも
自身の求めるべき快楽を見出すように、行為は続いた。
自然の理に反した性の高ぶりに身も心も重ね、ただただ快楽を求め、
私はまゆりとの繋がりを時間の経過も忘れ、没頭した。
互いがその終わりを迎えるまで、私達は同じ動きを繰り返し続けた。
唇、乳房、クリトリス同士が幾度となくキスをする。
これが男女の間での関係なら、互いの性器がその補完的形状に意味を見出し、完全なる行為の完結が来る。
だが、私とまゆりは埋めようのない互いの性器をただ繰り返し、触れ合わせるだけ。
満たされることのない行為はある意味では不完全で無意味な未完の慰め合いにすぎない。
だが、ある意味ではそれは永遠に完結することなく続く、未達の快楽を知ったことになる。
まゆりとの繋がりはきっと、そんな後者の悲しくも幸せなこれからの短い充足を私に与えてくれたのだと……
私は快楽の淵に立ち、そう感じた。

「クリスちゃん……まゆしぃ、もぅ、もぅ……んああっ！」
「わたしも……ダメっ……イくっ、イっちゃうううう」
真っ白になった世界。
そこには何もなく、全てがあった。
私の求めたものが。
繋がりが。
一人では到底知ることのなかった世界が。
帰ってきて、良かった。
まゆりに会えて、良かった……。
私の意識はそんな至福の瞬間で、不意に途切れた。

オカリン、オカリン。あのさぁ、最近気になることがあるんだよね」
大柄なダルが身を屈め、小声で俺に囁いてくる。
「なんだ、お前の脳内嫁の設定の話なぞ聞く耳はないぞ」
「そんなのわざわざオカリンに言うわけないっしょ。
あれあれ、最近のまゆ氏と牧瀬氏のスキンシップの謎に迫る」
ダルが視線で促すとその先にはソファーで隣同士になって座るクリスティーナとまゆりの姿だった。
もっとも、普通に座っているのは紅莉栖だけで、当のまゆりは彼女の膝にじゃれるようにして頭を寄せている。
まるで縁側に座ったお婆ちゃんが猫でも愛でているような光景だ……。
いわずもがな、そこには何やらアブノーマルかつ神秘的で、背徳的で、よくあるエロゲ設定の香りが漂っている。
……うほ。
「あの二人、いつからあんなに爛れた関係だったか、オカリンは何か知ってる？」
「ほぉ、ついにお前の性欲の対象が脱二次元から三次元への進化を遂げたという報告か？
あの二人が一体なんだというのだ、ダルよ。
いつもと変わらず中睦まじいきゃっきゃうふふな女子の姿ではないか」
「さすがオカリン、『てめぇどのエロ面下げてスカしたこと言ってんじゃねぇよ』そこにシビれる！あこがれるぅ！」
「ええい、この世界はそういった欺瞞と偏見に満ち溢れた不完全な失楽園なのだ！
敢えてここに宣言しよう……この狂気のマッドサイエンティスト、鳳凰院凶真が全ての不当な差別に
終始を打つべく――」
「オカリン、お約束台詞、乙……」
振りあげた拳が行き場を失くし、宙空に震える。
そんな俺の空しさを知ってか知らずか、視線の先で
二人だけの不完全にして完成された世界を楽しむ紅莉栖達をぼんやりと眺め、うなだれた。
「……どうして、こうなった」
――。

「ねぇねぇクリスちゃん……」
「なぁに、まゆり？」
「えへへっ、ただ呼んだだけ～」
「なにそれ、意味わかんない……くすっ」
「えっとねぇ、いまさら思いだしたことなんだけど……クリスちゃんとクリスチャン、って似てるよねぇ～」
「……私も今更なんだけど、冒涜的なネタでオチを締めようなんて……やっぱりどこか患ってるんだわ、
この世界線の創造主は」
「ねぇねぇあそこにある変な数字の機械ってなんだろうね。
5．963……って、なんだろうねぇ」
ニキシー管を使った妙にレトロな置き物が目に付く。
また岡部と橋田が未来ガジェットの新作でも作ったんだろうか。
……まぁ、この際それはどうでもいい。
今の私はこの世界がとても満ち足りたものに感じているのだから。

トゥットゥル～☆
はじめまして。こんにちは
重箱の隅を突くかのようなマイナージャンル街道をひた走っている
サークルにのこやのにの子と申します。

…って書いたけどSteins;Gateアニメ化来ましたね。来てしまいましたね！！
うちのサークルではもう通産５冊目のシュタゲ本になりますが、
ドラマCD、コミック、PCゲー化、アニメ化と、
ここまで話題に事欠かないゲームになろうとは！
正直なところ今年の夏は燃料(本家的な意味で)がなくて
さみしい思いをしてるんだろうなーと思っていたので嬉しい大誤算でした。

ひさしぶりに話題に付いていけるだけついていきたいくらい
嵌ったゲームなのでお金の続く限り踊らされたいと思いますw
でも、コミケ物販が買えない参加者のかなしさ…
通販やってくれるよね、やってくれると信じてる…

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

本について。
アアアアァァ甘ったるかったぁあああああああああ！！！
みなさん尻がかゆくなったり口の中が砂糖の味になったりしませんでしたか。
私は最後通しで読む際全身トリハダに包まれました。
ひどい黒歴史を作ってしまった瞬間であった…

さてさて、今回は上にも書いたとおり5冊目のシュタゲ本になりましたが、
うちのサークル知らない方のためにちょっとご説明を。

うちのサークルでは主にオカリンとクリスティーナの恥ずかしい
らぶらぶエロを扱ってるのですが、(っうかそれしかない)

1冊目「よろず御膳参」でサンクリ46で初めて本を出し、
2冊目「よろず御膳四」がサンクリ47
3冊目「よろず御膳五」がcomic1☆4
4冊目「Steins;Gate再録～よろず御膳　参・四～」が再販希望が
異常に多かったよろず御膳の参・四を再録した本です。

※ちなみによろず御膳というのはうちのサークルで扱っている、
１イベント限定の本の名前です。)
内容としては、１冊目が単発のバカエロ話。
2，3冊目がSG到達後の続きもののシリアス？らぶらぶ話です。

そして今回はというと、2，3冊目の続きではあるものの
1冊目のバカエロ路線をもっかいやりたかったので、
タイトル通りの割とバカなエロメイン話ですw
とにかくクリスティーナをエッチにかわゆく描こうという目標のもと
頑張って描きましたので、楽しんでいただける本になってたらいいなー
紅莉栖の心情としては、3冊目の続きなので
SG後の記憶を徐々に取り戻していって
オカリンと新しい生活を楽しんでいる(妄想)あたりです。
アメリカ帰国設定は今度やりたい…な…

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そして！今回ゲストページをな、なんと五ページも頼んでしまいました！
しかもまゆしぃ×紅莉栖もの！空気を読まない選択に痺れるあこがれ…ｒｙ
ただでさえ百合好きの私にとってまゆクリというのは至高の萌えジャンルなので
なにも断る理由がなかったぜ！いいものをありがとうでしたー。禿げ萌えた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

さいごに、宣伝？ですが…
次回のシュタゲ本はおそらく10/11のカオヘ・シュタゲオンリーイベント
「chaos;gate」にて発行予定です。みんな来ようぜ！！！

ではでは、長くなってしまいましたが、またお会いできますればー。
エル・プサイ・コングルゥ！

２０１０　８　　にの子

奥付

誌名:俺の助手のデレが有頂天で
とどまる事を知らない

発行日:２０１０　８　１５　(Ｃ７８)
作者:にの子(にのこや)

ＨＰ:http://ninoko.sakura.ne.jp/
メール:ninoko1101@nifty.com

印刷：マツモトコミックサービス様

第2版：8/20

御意見ご感想などありましたら
ＨＰのweb拍手、メール、ブログのコメ欄など
ご利用くださいませ！

2010 ninokoya presents

"ore no josyu no dere ga utyouten de todomaru koto wo siranai
Steins;Gate fanbook

18